

KiSS-18の妥当性についての一資料

菊池 章夫・長濱 加那子*

Some data on validities of KiSS-18

Akio Kikuchi・Kanako Nagahama

社会的スキルの測定尺度であるKiSS-18（菊池 1988）について、全国的な成人のサンプル1,212名を用いて、その妥当性を検討した。年齢との関係では、男性では年代が高くなるとこの尺度の平均値が高くなる結果であったが、女性では40-50代でそれが高かった。セールス職の職務満足感尺度（安達 1998）や服飾行動尺度（永野 1994）との関係では、前者の職務内容・人間関係、後者の適切性・流行性などの下位尺度で高い相関関係を示し、この尺度の概念的妥当性が確認された。

キーワード：社会的スキル 職務満足感 服飾行動

■ 問題

KiSS-18（Kikuchi's Scale of Social Skills: 18 items, 菊池 1988）は、対人関係を円滑に営むスキルとしての社会的スキルを総体的に測定する尺度として広く用いられてきている。この尺度は臨床心理学者のGoldsteinほか（1980）の「若者のための社会的スキルのリスト」（50項目）をもとに作成されている。このリストでは社会的スキルを、a）基本的なスキル b）より高度なスキル c）感情処理のスキル d）攻撃に代わるスキル e）ストレス処理のスキル f）計画のスキル に分類している。KiSS-18は、この意味での社会的スキルがどの程度身についているかを測定するものといえる。

KiSS-18の妥当性については多くの資料が収集されてきているが、こうした資料は 1）他の尺度との関係と 2）行動指標との関係にまとめることができる（菊池 2007）。1）については、この尺度の得点が感情的コミュニケーション・対人的コンピテンス・自己開示・自己効力感・ソーシャルサポート・コーピングなどの積極的な体験とプラスの関係にあり、逆にシャイネス・対人不安・孤独感・むなしさ感・おたく傾向・ストレスなどの消極的な体験とはマイナスの関係にあることが分かっている。2）の行動指標との関係では、年齢や対人的体験、向社会的行動、コミュニケーション行動、性行動などとの関連が指摘されている。

こうしたことを背景として、この資料では、たまたま入手できた多数の一般成人のデータを用いて年齢との関係を分析するほか、これまでに検討されてこなかった尺度（セールス職の職務満足感尺度・被服行動尺度）との関係を分析しようとしている。

*大学院 総合人間科学研究科

■ 方法と対象

これまでも成人のデータは報告されているが、それはある一企業体の勤労者についてのものである（田中 2007）。これに対して、今回の対象者は（株）クロス・マーケティングのインターネットアンケート・モニターで、都道府県別・性別・年齢（20-60歳以上）などを組み合わせた群から無作為に抽出された一般成人のサンプル（配信数約10,000・有効回答数1,212／男573・女639）である。回答者の居住地は全都道府県にまたがり（人口比により配分）、職種では会社員・公務員などの非管理職（30.4%）、専業主婦（19.1%）、パート・アルバイト（12.4%）が多い（学生は含まれていない）。

「日常生活一般調査」と題されたこの調査では、性別・年齢・居住地域・職種などのスクリーニング項目のほかに多数の質問項目が含まれているが、その一部として次の3つの尺度が用いられている。これらの尺度はその作成の過程で、信頼性や妥当性がすでに確かめられている。

KiSS-18（菊池 1988） 若者の社会的スキルを測定する18項目（上の6分類から各3項目）で構成された5件法の尺度。「他人を助けることを上手にやれますか」「他人が話しているところに、気軽に参加できますか」「相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか」などが項目の例である。この尺度は実際には若者だけでなく、中学生から成人、高齢者まで広く用いられている。対象者全員が回答した。

セールス職の職務満足感測定尺度（安達 1998） 職務内容（9項目）・職務環境（8項目）・給与（7項目）・人間関係（10項目）などへの満足感の4下位尺度から構成され、職務満足感を測定する4件法の尺度である。「今の仕事に興味をもっている」「昇進や昇格は公正である」「年齢や地位にふさわしい給与である」「職場の人間関係はよい」などが、それぞれの下位尺度の項目の例である。この尺度は内容的にはセールス職に限らず、職務満足感を全般的に測定する尺度といえる。対象者のなかで「正社員・派遣など」であって「2人以上の職場」の者562名（男性365・女性197）が回答した。

被服行動尺度（永野 1994） 被服の流行性・機能／快適性・社会的適切さ・経済性についての4つの行動次元（各5項目）を測定する7件法の尺度。「いまどのようなファッションが流行か知っている」「丈夫で長持ちする服がよい」「仕事の内容にふさわしい服装をするようにしている」「高価な衣服はいらない」などがそれぞれの下位尺度の項目例である。この尺度には対象者全員が回答した。

このほか分析のカテゴリーとしたのは、性別と年齢・年代（20・30・40・50・60以上代の順に252・255・251・227・227／男女別の人数は表1をみよ）である。

■ 結果と考察

上の5つの年代別のKiSS-18の平均値は、表1のようであった。男性では年代が高くなるにつれて平均値が高くなり、この結果は田中（2007）が3,305名の男性成人勤労者について収集したものと同じである。いずれのデータからも、年齢が高くなるにつれて社会的スキルが身についていくことが明らかである。成人の女性についての十分な数のサンプルの結果は今回が初めてであるが、男性での結果が平均値の直線的な変化であるのに対して、女性の結果はやや複雑な様相を示している。表1に見るように、女性では40・50歳代でこの尺度の平均値が高く、

その前後ではそれが低くなっている。今回の対象者については、「専業主婦」が多く含まれ（女性全体の35.8%）、60以上の年代でその比率が高くなっている（64.9%）。このことを含めて、男性よりも女性のキャリア・パターンが複雑であることがこの結果に影響しているよう。（田中2008の私信では、この女性の結果には年齢と世代との両方の要因がかかわりを持っていると指摘されている。）

このサンプルについての年齢との相関係数（ r ）は、全体で.101**（男性で.171**・女性で.027 ns）である。男性では年齢とこの尺度の得点との間に、弱いながらも有意の関係がみられるが、女性ではこの関係は有意ではない。平均値にみられる傾向がここにも反映しているといえる。

表1) KiSS-18の年代差

	男性／n	平均（SD）	女性／n	平均（SD）
60代以上	113	63.25（9.05）	114	57.80（10.47）
50代	115	60.16（10.14）	113	59.02（11.98）
40代	114	60.04（9.87）	137	59.06（9.93）
30代	118	58.73（12.96）	137	56.87（12.96）
20代	113	57.35（11.86）	139	57.91（10.74）
合計	573	59.89（11.02）	639	58.20（10.59）
年齢との r		.171**		.027 ns

注) 男女合計の年齢との $r = .101^{**}$ $^{**} p < .01$
KiSS-18の得点は18-90に可能。

KiSS-18と職務満足感との関係は、表2に示したようである。全体としてみると、職務内容（仕事への興味や満足感）・職場環境（組織としての会社への肯定的認知と態度）・給与（給与の適切さと公平さ）・人間関係（顧客・上司・同僚との人間関係の良さ）などとプラスの有意の関係がみられるが、特に職務内容（.458**）と人間関係（.319**）、職場環境（.284**）の下位尺度ではこの関連がやや強い。職務内容や人間関係、職場環境などへの満足感が高い者は、KiSS-18の得点が高くなる傾向がみられる。KiSS-18は対人関係を円滑にするスキルの有無を測定する尺度であることから、この結果はうなづけるものである。これに対して、給与（.180**）の下位尺度ではKiSS-18との関連は弱い（女性では給与との相関は有意ではない）。

KiSS-18と被服行動尺度との関係は、表3のようであった。全体としては、被服の流行性（最新のファッションやその情報への関心）と適切性（その場や仕事に適した服装への関心）の下位尺度でやや高い相関係数（.253**と.280**）が認められ、その機能／快適性（デザインよりも動きやすさや快適さを重視）と経済性（価格の安さを重視）の下位尺度（.192**と-.129**）と

表2) KiSS-18と職務満足感

	男性（365）	女性（197）	合計（562）
職務内容	.462**	.639**	.458**
職場環境	.280**	.291**	.284**
給与	.208**	.133	.180**
人間関係	.333**	.299**	.319**

表3) KiSS-18と被服行動

	男性（573）	女性（639）	合計（1221）
流行性	.301**	.245**	.253**
機能性	.287**	.095*	.192**
適切性	.385**	.207**	.280**
経済性	-.075	-.196**	-.129**

注) ** $p < .01$ * $p < .05$

ではこの関連は低かった。被服行動の流行性と適切性とは対人的な内容の項目（「他人と区別してより個性的に見せようとする」「場違いな服装をしているのを見るのは耐え難い」など）がそこに含まれている。これに対して、機能／快適性と経済性とはこうした色彩は少ないので、この結果は予想されることである。またこのデータには性差が見られ、男性ではKiSS-18と機能／快適性の下位尺度との関連（.287**）が女性よりも強いのにに対して、女性では経済性の下位尺度とのマイナスの関連（-.196**）が相対的に強くなっている（経済性との関連は男性では有意ではない）。この結果は、男女の選好や性役割の違いから理解できるものかもしれない。

■ まとめ

KiSS-18（菊池 1988）と職務満足感尺度（安達 1998）・被服行動尺度（永野 1994）とを1,212名（男性573・女性639）の成人の全国規模のサンプルに実施したデータを用いて、KiSS-18の妥当性を検討した。KiSS-18の平均値は、男性では年齢と並行して上昇しているが、女性ではそうではなかった。年齢との相関では、全体と男性とでは有意の弱いプラスの関連が見られたが、女性では有意ではなかった。職務満足感では、職務内容と人間関係、職場環境とでやや高い有意でプラスの相関関係が見られたが、給与との関係は有意ではあるが相対的に低い数値であった（女性ではこの関係は有意ではない）。被服行動との関連は、流行性と適切性とで有意のやや強いプラスの相関関係が認められ、機能／快適性と経済性とはこの関連は弱かった（この点については性差が見られた）。これらのデータはこれまでに蓄積されてきたKiSS-18の概念的妥当性の資料（菊池 2007）に、新しい知見をもたらしたものと考えられる。

* この資料は、長濱・菊池（2008）の学会発表に加筆したものである。用いたデータは、（株）クロス・マーケティング社が実施した「日常生活一般調査」の一部で、大部のデータをご提供いただいた同社と担当の多田良子氏にお礼を申し上げる。

■ 引用文献

- 1) 安達智子 1998 セールス職者の職務満足感－共分散構造分析を用いた因果モデルの検討 心理学研究 69巻3号 223－228 [堀 洋道（監修）2001『心理測定尺度集Ⅱ』サイエンス社 303－306]
- 2) Goldstein, A. P., Sprafkin, R. P., Gershaw, N. J., and Kline, P. 1980 *Skill Streaming the Adolescent : A Structured Learning Approach to Teaching Prosocial Skills*. Research Press.
- 3) 菊池章夫 1988 『思いやりを科学する』川島書店
- 4) 菊池章夫 2007 KiSS-18研究の現況 菊池章夫（編著）『社会的スキルを測る：KiSS-18ハンドブック』川島書店 121－164
- 5) 長濱加那子・菊池章夫 2008 KiSS-18の妥当性についての一資料 東北心理学会62回大会 ポスター発表（東北心理学研究 59号 印刷中）
- 6) 永野光朗 1994 被服行動尺度の作成 繊維製品消費科学 35巻9号 468－473 [堀 洋道（監修）2001『心理測定尺度集Ⅰ』サイエンス社 291－296]
- 7) 田中健吾 2007 [資料] C:勤労者年代別資料 菊池章夫（編著）『社会的スキルを測る：KiSS-18ハンドブック』川島書店 VIII
- 8) 田中健吾 2008年5月20日 菊池への私信